



IC たより

公益社団法人 国際 IC 日本協会機関紙

一人ひとりのチェンジで信頼を築く

Initiatives of Change Japan

発行年月日 2015年10月24日
発行所 公益社団法人 国際IC日本協会
〒160-0004 東京都新宿区四谷 4-28-20
バレ・エテルネル 206号
TEL: 03-6273-1428 FAX: 03-6273-1429
E-Mail: info@iofc.jp
HP: www.iofc.jp

頒価 1部 100円

18

◇ 目次 ◇ I N D E X

第37回 IC 国際フォーラム報告

IC インターン体験談

学校訪問プログラム報告

他



「心をつなぐ、世界をつなぐ ～過去に学び、未来に挑む～」

第37回 IC 国際フォーラムを開催

戦後70周年という節目の年となった本年は、去る6月19日から21日まで、「心をつなぐ、世界をつなぐ～過去に学び、未来に挑む～」のテーマで第37回 IC 国際フォーラムが開催されました。メインスピーカーとして来日したソン・スベール氏（カンボジア王国国王最高顧問）を始め、IC インターナショナルのモハン・バグワンダス副会長（オーストラリア）、マザー・パク女史（韓国・圓仏教指導者）、チャ・クワンスン韓国 MRA/IC 本部総裁等、インドネシア、オーストラリア、韓国、カンボジア、セネガル、台湾、ドイツ、ベトナム、マレーシア、日本という10ヶ国・地域から様々な宗教・文化・年齢などの背景を持つ55名が参加し熱心に、そして率直に語り合いました。ソン・スベール氏の今回のフォーラムの基調講演の一部をご紹介します。

英知への道を選ぶために

「1987年に冷戦が終結して以来、新世界秩序という言葉をししばしば耳にしてきました。しかし、その新世界秩序というのは、強国、国連安全保障理事会の5つの常任理事国、あるいは、新しい経済強国であるG7やG8、はたまた、ブラジル、ロシア、インド、中国、韓国、南アフリカからなる台頭する経済パワーであるBRICSのためです。しかし、一体だれが、アフリカ、アジア、そして東南アジアの貧しい人々のことを配慮するのでしょうか？ 一体どの国がこれらの国の盟主となって、代弁し導いてくれるのでしょうか？ 日本がこれら、無防備で、顔の見えない人々の主張を人類にとって危険な炭化水素の削減について代弁したように。そうでなければ、テロリストや原理主義者が、アラールの神の名のもとに、公正さを渴望し、失うものは何もないと絶望している第三世界の若い人々を惹きつけてしまうことでしょうか。憎しみや暴力、そして、戦争にとって代わる愛や思いやりをどのようにしたら促進できるでしょうか？ どのようなビジョンを苦しみ貧困にあえぐ人々に与えられるでしょうか？ 貧困や束縛からの解放のためにどのような希望を与えられるでしょうか？ 貪欲、麻薬の誘惑、そして、簡単にお金を手に入れようとするのに対してはどうでしょうか？ 倫理的な縛りではなく、家族を愛し思いやりという道徳教育は、方向性と指標を失い全てが黙認されがちな社会においてまだ意味を持っています。

私達カンボジア人は、何十年にもわたってクメールルージュ体制下や、ベトナムの占領下で数々の残虐行為に苦しんできましたが、今、戦乱の燃え盛る、シリア、イラク、イエメン、スーダン、マリ、リビア等、又、ウクライナのような国で、これらの国々の難民の人たちを公正に扱おうと誰が思いやってくれるのでしょうか？ [《次頁へつづく》](#)



第37回 IC 国際フォーラム 2015
The 37th IofC International Forum
心をつなぐ、世界をつなぐ ～過去に学び、未来に挑む～
Connecting Hearts, Connecting the World
～Learn from the Past, Challenge the Future～



同じ神やアラーを信じる人々が、同じ神の名を拝しながら戦っていますが、実際はそれぞれの力の保持をより強めようとしているのです。イランによって代表されるシーア派はサウジアラビアに代表されるスンニ派と、イエメン、イラク、そして、シリアで争っているのです。そして、この悪循環は、イスラムとはまるで関係のない歴史的背景の下で次々と繰り返されているのです。この世界に充満している、私たちが毒し、終わりのない苦しみの連鎖をもたらす憎しみの心ではなく、愛をもった慈悲深い心が語りかけてくる英知への道を選ぶことで、私たちが分裂させ不仲にさせる歴史的な重荷を捨てなくてはなりません。



謙虚な気持ちをもって、他の人々が自分たちの習俗・習慣、そして信仰と共に生存できる権利を認めることが可能でしょうか？ 自分たちと違う人たちを受け入れる寛容な心は、もはや美点ではないのでしょうか？ 邪悪なことや間違っただけの行動に寛容にということではありません。しかし、他の人々の望みや信仰に敬意を払うということです。神道と仏教は日本で共存でき、キリスト教も今日では調和を保っている一方、アフガニスタンでは、タリバンが、イスラム教が到来する前から存在していたバーミヤンの仏陀の巨大石像を破壊しました。中国では、仏教、道教、そして儒教も共存しています。他の人々より勝っているから、彼らを排除しようとする私たちは一体何者なのでしょう？ 間違っていると他の人々を非難して指差す時、自分に向いている3本の指が、自分の方が三倍間違っていると知らせているのです。仏教の教えには、「もし、悪を持って悪に應えるなら、悪は何時終息するのか？」と書かれています。それは、キリストの「右の頬をうたれたなら、左の頬を差し出ささい」という教えと重なります。復讐という悪感情を抑えるのはたやすいことではありません。しかし、この気持ちに抗うことこそが、心の革命的なものです。キリストが代弁したように、「汝の敵を愛せ」ということは難しいですが、それは、私たちの心と精神の強さなのです。……



私たちの人生が道徳的にどのような過程を経るかということは、私たち一人ひとりの人となりによりま

す。しかし、宗教が教えてくれるのは、自分自身を知る道を見出すための神聖な贈り物である批判的な心をもって、私たちの心の声、ただ経典に縛られるのではなく、『自由な良心の声』、に耳を傾けるということです。その心の声は、丁度、私が1995年に強い政治的危機とプレッシャーに出遭った際のように、逆境に向き合う勇気を持ち、試しの時に際し、神意の強さに身を任せ、偉大なことができるように導いてくれることでしょ

フォーラムで学んだもの

このフォーラムでは、多くの体験を聞いた全体会議に加え、ICの掲げる、絶対正直・絶対純潔・絶対無私・絶対愛という精神に自分の在り方を照らし合わせ、心の奥の心に耳を傾け、静かに内省する時間（Quiet Time、静かな時間）、様々な人たちが小さなグループで深い話し合いができたファミリーグループの時間、パネル・ディスカッション、そして、楽しい「文化のタベ」での歌や文化の紹介に加え、2014年AWDFアフリカ・ワールド・ドキュメンタリー映画祭で受賞したICのドキュメンタリーフィルム「許しの彼方へ」も上映されました。これは、南アフリカのアパルトヘイト政策に反対していた黒人のリーダーの指示による無差別テロで娘を殺された白人の母親と、その指示を出した黒人のリーダー（現国会議員）が、劇的に出会い、互いの不信感を克服し許し合うようになったという実話です。現在も、南アと世界の未来のために、2人で融和のメッセージを伝えるべく各国を訪れているというストーリーは、参加者に大きな感銘をもたらしました。

閉会式での参加者の感想や学んだことを紹介します。
「無関心はいけなないと気付きました。ICに車をもらいました。運転手は自分で、他の人を乗せることができます。GPSは人生のヒント。多くの先輩の人生経験を聞いて自分はまだ子供だと感じました。本当に大切なことを学んでいきたいと思います」（日本の大学生）
「この短い会議の間に多くの人に親切にしてもらい親しくなれました。人を簡単にジャッジすることなく心を開き、人と人の間に橋を架けていきたいと思います」（ドイツ人の大学院生）

「ヨーロッパで和解が出来て、何故アジアで出来ないのだろうか？ 『銃で過去を打てば、大砲で打ち返される』という言葉があるように、過去から学ぶことは重要です。世界は今危険な場になっていますが、それは危険な人が多いからではなく、皆が声を挙げないことが原因であると思います。自分は、サイレント・マジョリティにならず声を挙げていきたいです」（ベトナム人の大学院生）



「『有難う』という言葉には、人を癒す力が、『ごめんなさい』という言葉が発するのには、時間が掛かるかもしれませんが、良い人間関係を築きたいというメッセージが込められていると思います。何かをしてもらったことは忘れてしまうかもしれませんが、その時の気持ちは忘れることがありません。自分も他の人たちに親切にできるように努めていきたいです」（ベトナム人参加者）

日本の役割

最後に、ICインターナショナルのモハン・バグアングス副会長は、「お弁当、トイレ、空港、いたるところで日本の高い質を感じました。その質は日本特有のもので、心の中から生じています。世界には大きな癒しが必要であり、それを可能にする資質を備えた日本に、世界のICの中でもリーダーシップを求めたいと思います。マーガレット・ミード女史（文化人類学者）が、『良識あるわずかな人間の集まりが世界を変える可能性がある。実際、世界を変えてきたのはそういう人たちだけなのだ』と言っていますが、それは、一般市民の私たちにも当てはまると思います」と述べました。

それに応えて、矢野弘典会長は、「年齢や社会的立場等に関係なく参加できる、このICフォーラムでは心が洗われました」と参加者全てに感謝し、「和解のためには、“冷静な頭”と“思いやり”、そして一歩を踏み出す“勇気”が必要です。ICの高い志を引き継いで、今を生き切りたいと思います」と述べました。

（尚、このプログラムのために、一般財団法人MRAハウスの助成を頂きました）



アジアの若い女性チームが活躍

本年も学校訪問プログラムを実施

本年の学校訪問プログラムには、インドネシアのアイシャ・アナスさん（英語教師）とベトナムのヒュン・タウさん（ビジネスウーマン）、マレーシアのリー・チーリンさん（NGO職員）、そして、更にシャオ・ユンウェイさん（元会社員、ワーキングホリデー・ビザで来日）という元気な女性4名のチームで、5月22日から1ヶ月にわたり東京都、つくば市、静岡県で小学校から大学（インターナショナルスクールを含む）まで14校を訪問し、多くの生徒・学生さんたちと交流を重ねました。



各国の文化の紹介と、寸劇やICのメッセージソングやメンバーのチェンジの体験の紹介等を通してのこころの教育の部分で構成されたプログラムは、本年も訪れた各校の生徒さんたち、そして先生方から大変好評を得ました。

又、公益社団法人服飾文化研究会の国際部のメンバーの方々から、着物の歴史を習い、実際に浴衣を着せてもらい、茶道や盆踊りを体験する機会も頂きました。又、静岡や東京等での多くのホームステイも体験し日本の文化にも触れました。又、学校で交流した生徒さん達とは、その後もフェイスブックなどSNSを利用した交流が続いています。インドネシアのアイシャ・アナスさんは、この日本での学校訪問をきっかけに日本語を勉強しようと決心し、現在、毎日一所懸命に学んでいるそうです。



以下、各地での交流での生徒さんや先生方の感想をご紹介します。

相互交流がもたらしたもの

◇静岡の高校生

「正直今までアジアの国に興味はありませんでした。ですが今回アジアの国の人と話せて興味が湧きました。自分の話した英語が外国の人に伝わって笑顔で返事を返してくれたことがすごく嬉しかったです」「今回、他国の方と交流できたのは本当に貴重な体験だったと思います。将来海外に行きたいという思いが強まりました」

◇静岡の中学生

「いろいろな国のあいさつ、文化など知る事ができ良い経験になった。劇では、人を変えるには、まず最初に自分が何かしなければならないというような事が分かった。僕もこれから他の人の前に立ち、何かをやる時には、自分の行動に気をつけていこうと思った」

◇静岡の中学の先生

「日常の中にある日本の文化、中学生の日頃の活動のすばらしさに気づき、自信をもつ機会になったことがうれしかったです」

◇つくば市の中学の先生

「交流に向けて、生徒たちは楽しみにしていたので、とても意欲的に準備をしていました。当日はICの方の演劇も真剣に見て、考えさせられていた様子でした」

◇東京の小学校の先生

「自主学习で4つの国について調べてから今回の交流会をしたので、より興味深くお話を聞けたようです。給食でいろいろな話ができて楽しかったと言っていたのと、劇を通して“どの国も家族って同じような雰囲気なのかね、おもしろかった”と言っていた児童が多かったです」

◇東京の高校生

「ICは、世界中の孤児を助けたりするだけでなく、個人個人の家族の問題を解決してくれるのです。アイシャさんはICにより両親を再び愛せるようになったり、チーリンさんもIC協会のおかげで、両親とのギクシャクした関係が直ったそうです。世界を視点にした大規模な活動だけでなく、個人一人の問題を解決するIC協会のはば広い活動内容におどろき、感動しました」

「劇のことで、人と関わり合って生活している以上、すれちがいは必ずあるけれども、『変えたいと思う人に直面した時、私がまずすべきことは、自分自身を変えることだ』と思いました。国際理解の授業で学んだ、問題の多い国々を変えたいのなら、まず自分が変わる。人ごとにしなくて自分に適応させて考えることが大切だと思いました。・・・。家族や家庭の大切さ、一人ひとりの存在の大事さを教えて下さりありがとうございます。世界に目を向ける前に、まずは自分の家族に目を向けていく大切さに気づくことができました」

「今回、私は、マレーシアのチーリンさんとお話することができた。マレーシアは、戦時中に日本に植民地にされ、祖母や祖父の代はひどいことをされて、そのことを忘れないでほしいが、でも、それは私たちの世代でやったことではない。だから歴史はあるけど仲良くしたいとチーリンさんは思っていた。私たちは、そのことを教科書でしか知ることができない。でも、それをのりこえて仲良くなるというのは、両国にとってとてもいいことだと考えた」

「私がどこかの国について調べるときには、いつも本やインターネットから情報を得るし、また、その本やインターネットのホームページも日本人が書いたものだったり日本語に翻訳されたものなので現実味のない単純な情報という感覚で自分の中に残っていることが多かった。しかし、実際にその国の方の声や話し方を聞いて近い距離で交流することができたことで情報が経験として残ったように感じた。直接話を聞き交流することは、相互理解を深める上で非常に重要なことの一つだと思う。相互理解を深めることで、保護すべき文化や改善すべき習慣などが見えてくる。」

「普段あまり知ることがない他国の現状や文化を知ることができ、とても良い経験になりました。・・・。世界を変えるためには、まず自分が変わらなければならないという言葉が心に響きました。そして、自らアクションを起こし、様々な国で活動している国際IC協会の方々があつてよかったと思いました。」

（尚、このプログラムは、一般財団法人MRAハウスの助成を頂いて実施いたしました）



たくさんの経験や驚きに満ちた1ヶ月 インドICセンターでのインターン生として

山田 真輝(慶應義塾大学3年生)

私は現在、Asia Plateau(アジア・プラトー、インドのICセンター、以降APと表記)にて5ヶ月間のインターンをしております。今年の春、大学3年生の秋学期を休学してここでインターンをするという大きな決断をしました。今回はその決断に至った背景と、ここにきて1ヶ月で何を感じているのかについて書かせていただきます。



▲インターンの仲間たちと、一番左が山田さん

APに参加する決断をした理由は大きく分けて3つありました。1つはファシリテーションを英語で学びたかったこと。2つ目は世界中の人とつながりたかったこと(APを訪れる人や、共に生活するインターンの仲間に魅力を感じていました。今回はインド、チベット、韓国、日本人で構成されているチーム)。そして3つ目が、自分の人生に変化をつけたかったことです。そしてこれらを書面に起こしてメールで送信、skype(テレビ電話)での面接も行き、8月30日に出国しました。

APに到着してから1週間はセンターでの日課を体に馴染ませたり、ICの歴史をチームに分かれて調べたり、quiet time(静かな時間)を通してICの理念や自分の人生について考えるととてもユニークでゆったりとした時間でした。しかしそこからは、常に100人規模の団体の3~6泊のトレーニングプログラムを出迎える日々が始まります。産業界の人から、政界、インドトップクラスのMBAの学生、軍人を対象にしたプログラムもありました。これらのプログラムにおけるインターンとしての役割は3つあります。1つは、プログラムの中で歌や劇を通してメッセージを届けること。2つ目は参加者のサポート(食事の洗い物を参加者と共に行ったり、family groupの中でライフ・ストーリーをシェアする等)。3つ目は、運営のサポート(写真撮影、備品管理、ファシリテーション、セッションの設計等)です。もちろん毎回ホストとしてではなく、一参加者としてインターンもプログラムに参加します。そのため、それはそれはたくさんの人々と話し、たくさん写真を撮り、様々なショックを受けるわけなのです。

そんな刺激的な毎日を整えてくれるのが朝7-8時のquiet timeです。この時間が一日の中で一番のお気に入りです。なぜなら一番素直に自分と向き合い、将来の自分や自分を取り巻く環境について考えられるからです。quiet timeでは毎回“What are the images I hide behind”(本当の自分はどんな人?)や、“What is your purpose of life”(人生を生きる目的は?)、“How do you want to be remembered?”(どのような人として覚えられたい?)といった共通の問いを自分に投げかけますが、その中でも特に印象に残り、今でも考えさせられている問いを2つご紹介します。そしてこれを読んだ方は、ぜひこの2つの問いに対して考えていただきたいです。以下が2つの問いです。

“Are you the citizen your country needs?”(あなたは国が必要としている人材ですか?)

“Are you a part of the problem or part of the solution?”(あなたは、問題に加担している人?それとも解決している人?)

この2つの問いは私が今後生きる上で重要な羅針盤になりました。まだまだ自分の中で答えを探していますが、前者の問題に対しては、日本が必要としている人材になりたいですし、常に問題を解決している側になりたいと思っています。まだまだ書ききれないほどの経験や驚きにこの1ヶ月の間で遭遇したので、また機会がありましたら寄稿させていただきます。

【入会のお願い】

当協会は、皆様からの会費及び寄付金により運営されています。世界の平和につながる青少年の育成や国際交流活動等のため、是非ご入会の上、ご支援ください。

- 個人正会員 会費年額 6,000円
(議決権を行使できます)
- 個人賛助会員 会費年額 3,000円以上
- 法人賛助会員 会費年額 50,000円(一口)

@編集後記・発行が遅れて申し訳ありませんが、本年の国際フォーラムと学校訪問のご報告をさせていただきます。追って、本年のスイス・コーでの国際会議や日中韓の青年たちによる会議、それに先立って行われた日韓修好50周年を記念した日韓ダイアログ、カンボジアでのアジア・太平洋青年会議の様子等もご報告させていただきます。・終戦後、日本に数年間滞在して活躍して下さって以来、いつも日本の方々をケアして下さっていた、ノルウェーのクレア・ウイヘルムセンさん(イエンツさんの奥様)が、去る7月24日に亡くなられました。又、台湾のIC活動の中心になられている、シュウ・ショウフンさんご夫妻が、8月2日にご子息(4歳)を事故のためカンボジアで亡くされました。お二人のご冥福を心よりお祈りしたいと思います。(編集委員:岡本 さくら、兼松 恵、長野 清志、中山 啓介、弓場 睦)